

2) ムラサキシキブ＝紫式部

ムラサキシキブはクマツヅラ科の落葉低木で、北海道南部、本州、四国、九州の山野に自生し、実が美しいことから家庭の庭にも植えられている。高さは2~3mで夏、葉腋に淡紫または白色の小さな花を密集して付ける。しかし同じ花序の中で早く咲くものと、遅く咲くものがあり、過酷な自然条件の変化に対応して必ず結実できるように配慮されている。果実は径約3mmの球形で紫色に熟す。園芸品には白い実がなるシロシキブ(白式部)もある。和名の起こりは紫色の果実を密集してつけるところから『源氏物語』の作者である「紫式部」になぞらえたものである。一説にはムラサキシキミが転訛したものともしう。別称はミムラサキ、タムラサキ、トリムラサキ、メジロノキなど、さまざまな呼称がある。学名は『*Callicarpa japonica*』で、属名はギリシャ語で「美しい果実」の意である。イギリスでは『Japanese beauty berry』、中国では『紫珠』と呼ばれる。『立華正道集』(リッカショウドウシュウ=1684年)では「実紫」として、1709年に著わされた『大和本草』(ヤマトホンゾウ)には、「玉むらさき」として記述が見える。これは「紫草」と区別してのことだろう(06-03-01 ムラサキの項参照)。

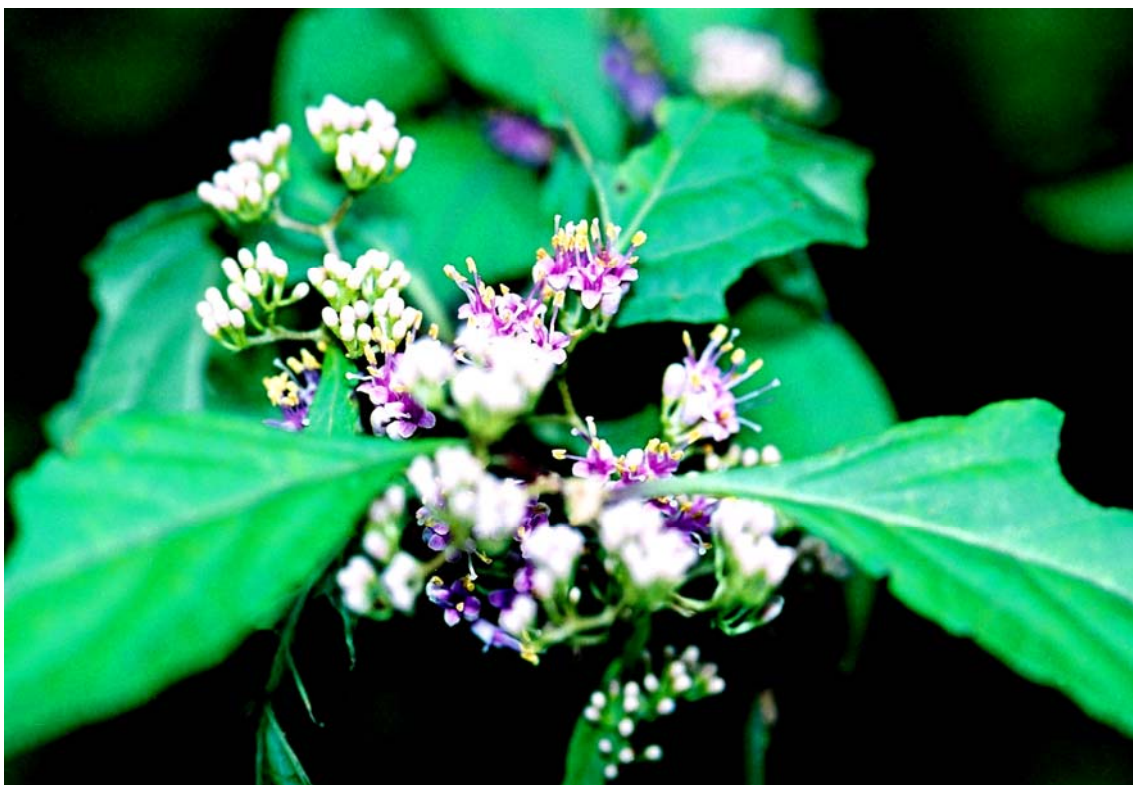
ムラサキシキブの利用は主に鑑賞用で、自然界では小鳥たちの食料として貢献している。材は堅く白色で木理が緻密であるために、大工道具類の柄や箸、硬度の高い良質な木炭としても利用される。しかしこれほど美しく山野に普通に見られる植物でありながら、『万葉集』や『記・紀』には見ることができない。

『源氏物語』の作者である紫式部は、この他にも『紫式部日記』『紫式部集』などを著わし、『後拾遺和歌集』以下の勅撰和歌集に60首近い和歌が残されている。父親は藤原為時で一族の曾祖父には藤原兼輔などもいたが、母親が夭逝したために、彼女の青春時代は必ずしも順風ではなかった。父の為時も当時の文人ではあったが決して裕福ではなく、やっとな越前の守(カミ)に任ぜられる程度で、彼女も父とともに越前に赴くが、あまりの積雪に驚いて数年で帰郷して、藤原宣孝(ノブタカ)の後妻となった。宣孝は式部と縁続きで、為時の上司であったこともあり、一家にとっては必ずしも幸せな門出ではなかった。その上先妻との間には多くの子供がおり、年齢も20歳以上も離れていた。一女を設けたがこの結婚生活は長くは続かず、間もなく宣孝は他界し紫式部は若くして寡婦となった。『源氏物語』は、こうした逆境を乗り越えた末に描かれた王朝文学で、そこには没落して行く貴族の哀れな末路や、理想の男性像や女の悲哀など、人それぞれの生き様が彼女の女性としての視点から巧みに描き出されている。紫式部は45歳ぐらいで世を去ったらしく、京都の紫野には式部の墓と伝えられる墓地が、今でもひっそりと残っている。

ムラサキシキブは秋になると花屋さんの店先でもよく見られる。白式部はあまりお目にかかることはないが、遠く『源氏物語』の世界に思いを巡らせながら、紫式部を育ててみるのも、ガーデニングの一つの楽しみ方といえようか。



ムラサキシキブの花。この花は一度に開花せずに時期をずらして数度にわたって開く。雨の多い時期に開花するので、受粉が確実に行われるための配慮だろう(埼玉県川口市)。



紫の部分は開花済みの花で、白い部分は次に咲く花の蕾である(さいたま市浦和区)。



すっかり熟したムラサキシキブの果実。重みで枝が枝垂れることが多い(埼玉県深谷市)。



鈴なりのムラサキシキブの果実。低山帯の雑木林の中でもムラサキシキブはよく見られる。しかし栽培品よりも、果実がずっと小さいことが多い(埼玉県深谷市)。



ムラサキシキブの白実種は白式部という(さいたま市大宮区)。

[目次に戻る](#)